

戦前・戦後における文化運動に関する民間アーカイブズの活用促進方法の研究

創宇社建築会の時代

—竹村文庫の資料から—



はじめに

1923年(大正12)9月1日、相模湾を震源とする関東地震が発生し、未曾有の大災害、関東大震災となりました。その震災の直後の東京において、逓信省(かつて存在した交通、郵便、通信等を所管した官庁)の営繕部門に勤務する若いノンエリート建築家たちが、創宇社建築会(創宇社)を結成しました。

創宇社建築会は、最初の展覧会を1923年11月に東京銀座の十字屋楽器店で開催してから、1930(昭和5年)12月に東京有楽町の東京朝日新聞社で開催した最後の展覧会まで8回の展覧会を開催しました。彼らの主張は建築作品による自己表現に始まり、活動を通じてその作品と主張を変化させ、最後の展覧会では社会のための「建築実践」を標榜しました。

そうした創宇社やその系譜につらなる建築家たちの活動に関する資料を収集、保存したのが第3回展から参加した竹村新太郎でした。この冊子では、竹村が残した竹村文庫の資料を通じて創宇社について概観します。

目次

創宇社建築会の結成：展覧会のポスターと目録	2
創宇社建築会の展開：前衛芸術との共同から社会のための建築へ	3
同時代の建築界のなかで：分離派建築会作品集や建築ジャーナリズム誌	4
創宇社建築会后：建築科学研究会から戦時の伏流を経て戦後の建築運動へ	5
竹村文庫が伝える創宇社建築会の記憶：	
創宇社建築会関連略年表／竹村新太郎が遺した竹村文庫／竹村文庫のこれから	6

凡例

- ・本冊子はJSPS科研費JP19H00019「戦前・戦後における文化運動に関する民間アーカイブズの活用促進方法の研究」(研究代表者佐藤美弥)の研究成果広報冊子です。
- ・本冊子の編集・執筆・構成は佐藤美弥が行いました。
- ・本冊子に掲載した資料は本冊子に掲載した資料はすべて竹村文庫が所蔵するものです。
- ・本冊子に掲載した資料のうちポスター5点の写真は、第14回ヴェネチア・ビエンナーレ建築展への出品のためデジタル化されたものです。そのほかの資料の写真は佐藤美弥が撮影しました。
- ・本冊子に掲載した資料の縮尺は同一ではありません。

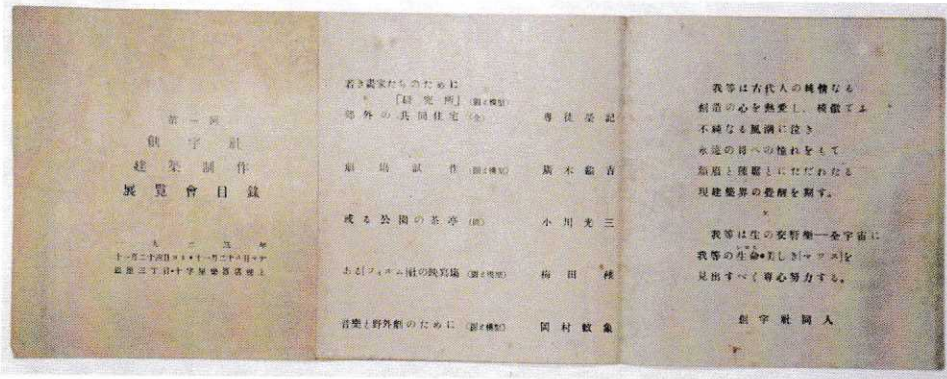
表紙写真 創宇社建築会同人(第8回展会場にて) 1930年

創宇社の最後の展覧会となった第8回展の会場で撮影された写真。左から、河裾逸美、竹村新太郎、広木亀吉、小川光三、渡苺雄、山口文象、海老原一郎、野口巖。背後には作品の図面とポスターがみえる。

創宇社建築会の結成

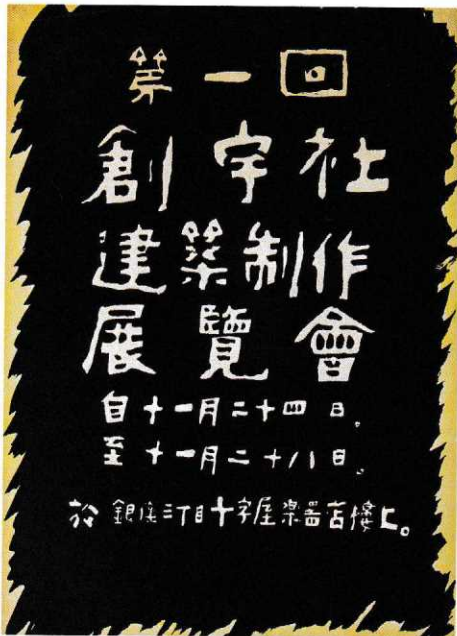
展覧会のポスターと目録

創宇社は1923年(大正12)11月24日から28日まで、銀座の十字屋楽器店の楼上で第1回創宇社建築制作展覧会を開催しました。Z折りのリーフレットが作成され、5人の同人の名前と作品の目録、そして宣言が印刷されました。結成時の同人は専徒栄記、広木亀吉、小川光三、梅田穰、岡村蚊象(後の山口文象)でいずれも、逓信省の営繕部門に勤務していました。第1回の作品はそのポスターと同様に荒々しく、彫塑的なものでした。



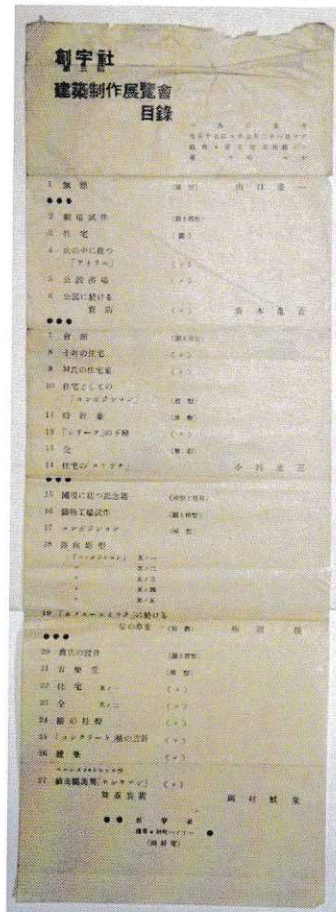
第一回創宇社建築制作展覧会目録 1923年

第1回創宇社建築制作展覧会の目録。第1面には会期と会場、第2面には1人1つずつの作品と出品者、そして第3面には宣言文が印刷されている。その宣言には模倣を否定し、創造を追求する姿勢が謳われている。こうしたスタイルは1920年に東京帝国大学を卒業した建築家が結成した分離派建築会の影響を受けたものだった。



創宇社第一回建築制作展覧会ポスター 1925年

第1回展のポスター。フリーハンドで版を彫り、黒一色で印刷した荒々しい表現。会場となった十字屋楽器店は震災で破壊された店舗を改修したものであった。



創宇社第三回建築制作展覧会目録 1925年

第3回展の目録。第3回展は、7月17日から21日まで、銀座の資生堂美術部で開催された。専徒が創宇社から離れ、岡村の実弟である山口栄一が出品している。



第四回創宇社制作展ポスター 1926年

第4回展のポスター。この展覧会から、彫塑的な作品だけでなく、空間構成を意識した作品が出現した。下の写真は会場風景を撮影したもの。



創宇社建築会の展開

前衛芸術との共同から社会のための建築へ

建築作品を通じた自己表現を追求した創宇社は、アヴァンギャルドの芸術家たちと共同して展覧会や舞台公演を行いました。それを通じて彫塑的な作品から、空間構成を意識した作風へと変化していきます。また 1929 年(昭和 4)の第 6 回展頃からはマルクス主義の歴史認識を受容し、最後の展覧会となった 1930 年代の第 8 回展では、来たるべき社会のための建築を展望する「建築実践」を主張しました。



劇場の三科ポスター

劇場の三科会員券 1927 年

1926 年 4 月に結成された単位三科は、翌年 6 月、東京市内 3 会場で三科新興形成芸術展覧会を開催した。会期中に舞台公演「劇場の三科」で、舞台上を動くオブジェ、光線と音楽を組み合わせた演目などを上演し、創宇社の同人も出演した。ポスターの意匠は、マルセル・デュシャンからの影響を想起させる。



創宇社無選共同建築展ポスター 1927 年

創宇社の第 5 回展として位置づけられた無選共同建築展のポスター。アヴァンギャルドの影響を受けて、名称の通り、無鑑査で出品できる展覧会であった。ポスターには鉄塔のような形象が描かれ、創宇社のロシア構成主義の受容を感じさせる。



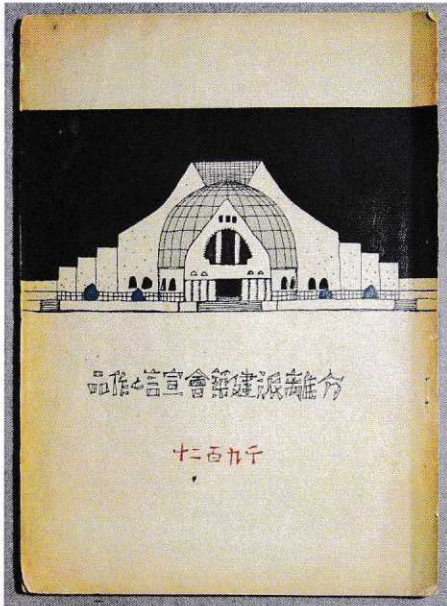
創宇社第 8 回建築制作展覧会・
新建築思潮第二回講演会ポスター
創宇社第 8 回建築制作展覧会目録
1930 年

第 8 回展が創宇社の最後の展覧会となった。同人 10 人のほかに、前川国男、谷口吉郎、川喜田煉七郎など外部の若手建築家も出品した。会期中に開催された新建築思潮第 2 回講演会で、岡村蚊象は「新興建築家の実践とは」と題して講演し、同時代の社会の現実を踏まえて、労働者のために、科学的な建築を提供する「建築実践」の重要性を訴えた。同人が出品した作品もそうした意図に沿ったものとなり、展覧会目録にはそれぞれの作品に説明文が付された。

同時代の建築界のなかで

分離派建築会作品集や建築ジャーナリズム誌

竹村文庫には創宇社同人たちが憧れ、また交流した分離派建築会の作品集や、創宇社の展覧会が特集された号などの建築ジャーナリズム誌も含まれ、出品作品の図版や展覧会の批評などを知ることができます。これらは同時代に入手したと思われるもののほか、竹村が近代建築運動史を研究する過程で収集したものも含まれると考えられます。



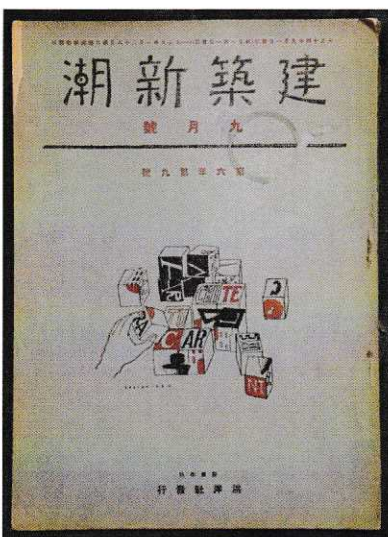
分離派建築会宣言と作品 1920年
1920年(大正9)10月に日本橋白木屋で開催された分離派の第1回展に合わせて、岩波書店から刊行された作品集。



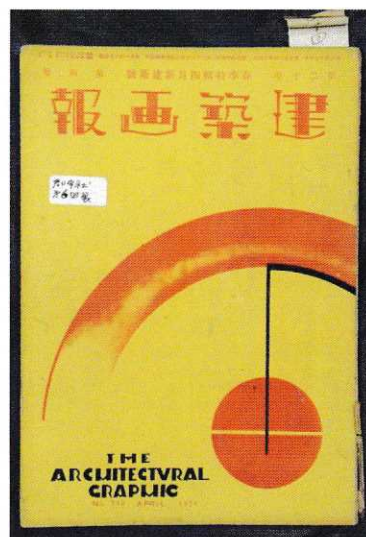
分離派建築会作品第三 1924年
1924年11月に銀座松屋で開催された分離派の第4回展終了後の12月に、岩波書店から刊行された作品集。山口文象の作品と文章が掲載された。



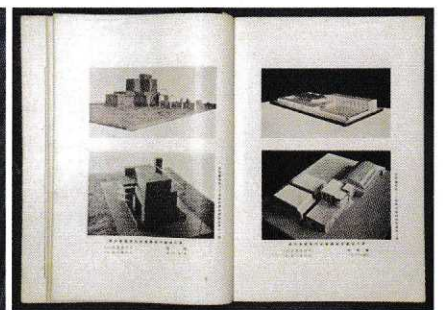
第6回分離派建築展覧会招待状 1927年
日本橋白木屋で開催された、分離派建築会の第6回展覧会の招待状。



『建築新潮』6(9) 1925年
洪洋社が刊行した雑誌。この号の表紙絵は吉田謙吉。創宇社の第3回展についての山口文象自身による記事があり、出品作品の図版が掲載された。



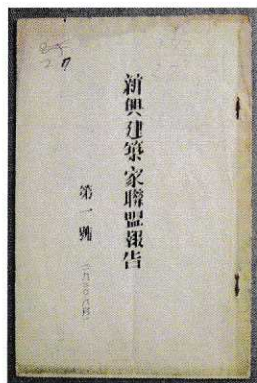
建築画報 20(4) 1929年
建築画報社が刊行した老舗雑誌。この号には創宇社の第6回展の出品作品の図版が掲載された。



創宇社建築会後

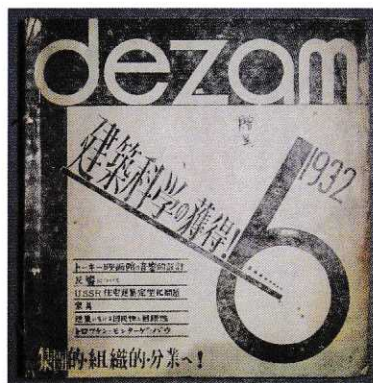
建築科学研究会から戦時の伏流を経て戦後の建築運動へ

1930年(昭和5)の第8回展の後、同人たちは、第8回展で提示した社会のための「建築実践」のアイデアを発展させ、小グループによる集団的な研究を目指した活動へと展開しました。1932年には青年建築家連盟(JAF)が結成され、建築科学研究会、青年建築家クラブと改称し、1934年まで活動しました。戦時期にはそうした活動もみられなくなりましたが、彼らは戦後、再び建築家の団体による活動の担い手となりました。

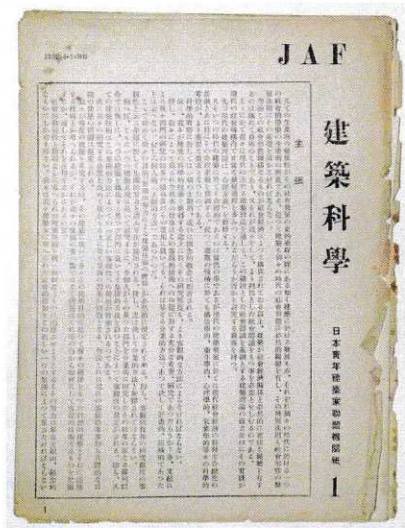


新興建築家同盟報告第1号
1930年

「新興建築の理論的並に技術的獲得」を目的に1930年(昭和5)7月に成立した、新興建築家同盟の準備段階から結成当初の動きの記録。同盟は従来の建築家グループとは異なり、詳細な規約を作り、研究のほか、職業紹介や購買などの機能を構想したが、短期間で瓦解した。



Dezam 第6号 1932年
京都帝国大学建築学科1930年(昭和5)入学生のクラス会が刊行した雑誌。この学年には西山卯三などが在籍した。彼らの一部は後に建築科学研究会に合流した。

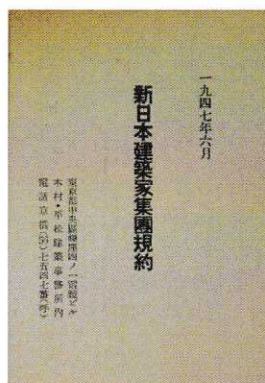


建築科学 1号 1932年 2号 1932年 4号 1933年

第8回展開催の後、中心人物であった山口文象が渡欧し、創宇社は目立った活動を行わなくなった。その後、1932年(昭和7)には、竹村新太郎など創宇社の同人を中心に、「集団的努力による建築技術の獲得」を標榜した青年建築家連盟が結成された。連盟は建築科学研究会、青年建築家クラブと名称を変えながら、1934年まで活動を続けた。

新日本建築家集団規約 1947年
建築新聞 第1号 1947年

戦後、1947年(昭和22)に結成された、建築家の全国団体新日本建築家集団(NAU)の規約と機関紙「建築新聞」の第1号。1930年代半ばにはそれまでのような建築家のグループによる活動はみられなくなっていたが、戦後の民主化の流れのなかで、山口や竹村などの創宇社同人を含む、戦前期以来の建築家たちが建築家の団体を復活させた。



竹村文庫が伝える 創宇社建築会の記憶

創宇社建築会関連略年表

- 1923 創宇社建築会(創宇社)結成
十字屋楽器店で第1回展開催(11月)
- 1924 国民美術協会主催帝都復興創案展覧会(竹の台陳列館)に出品(第2回展)(4月)
岡村蚊象(山口文象)分離派建築会第4回展に
会員として出品(11月)
- 1925 資生堂美術部で第3回展開催(7月)
- 1926 白木屋百貨店で第4回展開催(10月)
- 1927 東京朝日新聞社で無選共同建築展覧会開催
(第5回展)(6月)
東京市内3会場で単位三科主催三科新興形成
芸術展覧会開催(12月)
- 1928 岡村蚊象『アトリエ』9月号に「新建築に於ける唯
物史観」発表
- 1929 東京朝日新聞社で第6回展開催(2月)
第1回新建築思潮講演会(10月)
東京朝日新聞社で第7回展開催(12月)
- 1930 新興建築家連盟創立総会(7月)
東京朝日新聞社で第8回展開催(10月)
第2回新建築思潮講演会(10月)
- 1931 山口文象渡欧(1月~1932年7月)
官吏減俸反対運動に創宇社同人が参加
(5月~7月)
- 1932 創宇社同人などで青年建築家連盟(JAF)結成
(1月)
JAF、建築科学研究会に改称(6月)
- 1933 建築科学研究会、青年建築家クラブに改組
(10月)
- 1934 火曜会結成(12月)
- 1937 竹村新太郎『建築と社会』6月号に「創宇社建築
会の新建築運動」を発表
- 1947 新日本建築家集団(NAU)結成(6月)
- 1970 新建築家技術者集団(新建)結成(12月)

竹村新太郎が遺した竹村文庫

竹村新太郎(1906-1996)は東京の製本職人の子に生まれ、逓信省に勤務しながら工手学校で建築を学び、逓信省に勤務、第3回展の頃から創宇社に参加しました。以後生涯にわたって新興建築家連盟、建築科学研究会、新日本建築家集団(NAU)などの建築運動の担い手となりました。竹村文庫の資料は、竹村がその建築運動の過程で継続的に収集、保存したものです。竹村は1974年(昭和49)年10月に設立された新建千葉支部に参加し、1979年には千葉支部に、竹村を囲んで建築運動、建築や建築家さらには日本の文化を考える会として竹村塾が発足しました。竹村塾は、資料を後世に保存・継承し、活用してほしいとの竹村の思いにより、さらにより広い分野の人々との交流の場として開放することを目的として、1987年に竹村文庫へと発展し、竹村文庫の資料や竹村の言葉を掲載した『竹村文庫だより』の発行などを行いました。竹村文庫の貴重な資料は国内外の美術展や建築展に出品されてきました。

竹村文庫のこれから

竹村文庫は2010年(平成22)頃から活動を再開しました。定期的な会合や、新建千葉支部との共同企画の講演会を開催しています。2018年には『竹村文庫だより』11号を約20年ぶりに発行しました。またこれまで学術研究や展覧会への出品に活用されてきたものの、未整理の状態であった竹村文庫の資料の整理作業を新建千葉支部の方々と共同で進めています。資料の保存のために、中性紙封筒・中性紙保存箱への入れ替えを行い、資料目録の作成などを行っています。竹村文庫では、今後も引き続き資料の保存・活用に取り組んでいきます。

主要参考文献

『竹村文庫だより』11、竹村文庫、2018年/佐藤美弥「創宇社建築会の時代—竹村文庫からひもとく建築運動」1-35『建築とまちづくり』新建築家技術者集団、2015年-2018年/伊達美徳編著『新編 山口文象 人と作品』アール・アイ・エー、2003年/本多昭一著『近代日本建築運動史』ドメス出版、2003年

「戦前・戦後における文化運動に関する民間アーカイブズの活用促進方法の研究」

研究成果広報冊子

「創宇社建築会の時代 —竹村文庫の資料から—」

2020年3月25日発行
編集執筆 佐藤美弥
発行者 佐藤美弥

戦前・戦後における文化運動に関する民間アーカイブズの活用促進方法の研究

創宇社建築会の時代

—竹村文庫の資料から—